

向井信夫文庫について

文学部教授 板坂 則子

向井信夫文庫は、故向井信夫先生が蒐集された和本コレクションで、2009年に専修大学図書館に移譲されました。この文庫は、4,000タイトルに近い作品を集めていますが、そのほとんどが江戸後半期に作られた戯作（げさく）と呼ばれる版本です。戯作は、江戸時代の中頃の8代将軍の治める享保期頃、それまでの上方中心の文化が江戸に移ってくる「文運東漸」現象以降に、江戸という都市中心に作られた小説類の総称です。これらは、それまで文化の蓄積の薄い土地であった江戸で作られた、新しいかたちの作品群で、大衆性を何よりの特徴とします。ジャンルとしては、高級読み物である「読本（よみほん）」、絵と文章が共存し、現代のマンガの元祖とも言える「草双紙（くさぞうし）」、遊里を舞台とした風俗小説である「洒落本」、笑いを中心とする「滑稽本」、女性向けの恋愛小説の「人情本」などに分かれていますが、向井信夫文庫では、この中でも、草双紙と読本が中心となっています。ことに、文化4年（1807）以降の草双紙である「合巻（ごうかん）」と、江戸で出版された「後期読本」は、数多くの良品を蔵し、国内有数のコレクションとなっています。その他、考証随筆、吉原細見、歌舞伎に関する劇書なども豊富で、江戸期の書物の一大宇宙となっています。

向井文庫の特徴はまず、摺の良い本が多いことです。江戸期の書物は、製版本という、板木に彫って摺られ綴じられた形態を取っています。最初に作られて売り出された初版本がなくなると、また、摺って売り出されますが、これら「後摺本」は、「初版本」より手間が省かれることが多くなります。作者と挿絵を担当する浮世絵師が、最初に思い描いたイメージ通りの書物は、「初版本」のみであり、後摺本では、たとえば薄墨版や艶墨版がなくなり、意匠が代わってしまうことも少なくありません。向井信夫文庫では、読本を中心に、初版本が多く揃い、目を見張るような斬新で美しい版本が見られます。また他の特徴として、初版本のみならず、後摺本も含めて、同一作品を複数有していることが挙げられます。向井先生は、すでにお手持ちの本でも、さらに良版が出た場合には、それも重ねて購入なさったことから、初版と後摺の違いが分かる貴重なコレクションとなっているのです。向井信夫文庫の世界に入れば、江戸の書物の森の美しさを十分に堪能することができるでしょう。

次に、向井先生について、思い出すままに記しておきます。

向井信夫先生は、私の恩師です。大学院生の頃から、何か疑問に思うことがあると早稲田にあったお宅に伺い、また、電話でお教をを乞うていました。向井先生の書齋は、四方の壁が床から天井まで、びっしりと和本で埋め尽くされていましたが、先生は、そのすべてを読み込まれ、歴大かつ深甚な知識を、ご自分の中で体系的に構築しておられたように思います。何かお尋ねすると、すぐに必要な書を取りだして下さり、また質問には、真夜中過ぎに、答えが見つかったと電話をくださることもしばしばでした。

けれども、先生は研究者として本を扱われたわけではなく、あくまでも趣味として書物

を愛好される立場を貫かれました。どんなに貴重な書でも、それを必要とする人がいれば貸し出し、多くの知識を若い研究者に与えて下さったのです。向井先生に手を引かれて、研究者としての歩みを始めた院生たちも多かったと思います。

和本は書棚の前後2段に並べられていましたが、とても几帳面なご性格で、書物の列が崩れるのを嫌われ、常に整然と列が揃えられていました。書物をはじめ、自らの持ち物に執着されることがなく、特に金銭に恬淡とされてきました。「書物を買うときに値切ってはいいけません。店の言うままに1度に支払うべきです。そうでないと、次から良いものを持ってきてくれませんかよ」との教えでしたが、不肖の弟子はその足元にも近づけませんでした。

向井先生は、何よりもお洒落な方でした。コーヒーがお好きで、いつもきちんとスーツを着こなされ、胸にはポケットチーフ、頭には帽子、そして蝶ネクタイを着けられ、たばこを好まれ、いつも早足で歩まれました。喫茶店で本の話に長時間が過ぎると、30分に1回はコーヒーやケーキを頼まないと店に悪い……とおっしゃり、食べきれないほどのケーキが並びました。

向井先生は、学問の恩師であるばかりでなく、人生の恩師でした。そして、その向井先生が愛された和本が、専修大学図書館に収められて、はや7年が過ぎようとしています。その間、向井信夫文庫本を用いた大きな展示が何度も開かれ、多くの方に見ていただけました。書物は必要な人のために、という姿勢を貫かれた向井先生のご意向を活かし、これからもこれらの和本が活用されることを願っております。

平成 28 年 11 月